

## 紅椿と野草から生を促す人

鈴木比佐雄

宮崎睦子歌集『紅椿』に寄せて

宮崎睦子さんにとって短歌と詩とは、仲の良い母と娘の関係のようなものかも知れない。戦後詩の詩論に影響を受けた詩人たちは、小野十三郎の「短歌的抒情の否定」という戦後詩の詩論の呪縛に囚われて、短歌を作ることのためにためらいを抱えてきた。しかし宮崎さんはそれとは無縁に詩を書き継ぎ、短歌も大らかに詠んできた。第一詩集『美しき人生』の編集・校正の作業に目途が付いた頃に、今度は歌集の原稿を送るので、読んで欲しいとの連絡があった。歌集の出版の話は、詩集の打ち合わせの際にも初めから話が出ていた。そんな宮崎さんの思いから、私は長年にわたって温めてきた詩集と歌集作りをほぼ同時期に果たそうとしている強い意志を感じたのだった。詩人の田中作子歌集『小庭の四季』を今年の初めに編集し刊行したのだが、田中さんもまた詩と短歌の溝はなく、楽々と越境していたのだった。田中さんは戦争

中の女学校時代に大正天皇の従妹であり「白蓮事件」で有名な柳原白蓮から短歌を学ぶ機会があったそうだ。白蓮は大正時代に九州の炭鉱王に嫁ぎ「筑紫の女王」とも言われ、中国革命を支援した宮崎滔天の息子であった新聞記者の宮崎龍介と駆け落ちした「白蓮事件」を引き起こした。白蓮の戦後は、平和運動を行い龍介と共に幸せな晩年を送ったそうだ。この白蓮のように九州・福岡には、姦通罪を恐れずに情熱的な短歌を書かせる短歌の土壌があるのかも知れない。きっと宮崎さんにもそのような短歌の土壌が『紅椿』を書くことを促したのだろう。

宮崎さんと話していて、詩作よりも短歌を早くから作っていて、短歌への思い入れが特別に深いことも分かってきた。詩集『美しき人生』のテーマは、どんなに過酷な場面に遭遇しても人間は美意識を忘れないことによって、新たな一步を踏み出せるという強いメッセージが込められている。この歌集にも宮崎さんの同様の美意識は貫かれています。その溢れるような抒情を一気に述べるには短歌の韻律は相応しかったのかも知れない。宮崎さんの詩的精神は同じだが、詩になるか短歌になるかの表現の違いは、個々の作品に内在するテーマやその内的リズム

ムの広がりにも負っているのだろう。

歌集は、一章「水仙」、二章「冬椿」、三章「紅椿」、四章「秋桜」、  
五章「陽炎」、六章「野草」に分かれ、各十二首の計七十二首が収録さ  
れている。

一章「水仙」の冒頭の気品が溢れる清々しい短歌を引用してみる。

君の母冬の寒さに耐えて咲く

水仙のような清き香りす

宮崎さんの短歌の特長は、命の危機にある「冬の寒さ」の中でも毅然として生きた「君の母」の存在を「水仙のような清き香りす」と記すように、身近な他者の尊厳を匂やかで色鮮やかに謳い上げていることだ。夫の母の凜とした存在は、まだ白い息の残る寒い春先に咲く水仙そのものであると直観した。宮崎さんの視線は、人生の儂さを見詰めるながらもその中に可憐に咲く人間存在の美しさを心に刻んでいく。一

章の最後には次の短歌が置かれている。「テーブルに君の故郷の蜜柑置き 眺めて香って心和めり」。この短歌を読むと、夫の存在を「故郷の蜜柑」と重ねて、「眺めて香って心和めり」と夫の匂いを想起して、夫との語り尽くせなかつた無言の対話をしているように感じられるのだ。

二章「冬蓄」は、残された命を懸命に生きる夫の姿を想起したり、夫がいなくなった後には空虚感を抱き、また新たな生命力も記したものだ。章タイトルになった短歌を引用してみる。

この冬に蓄膨らむちからあり

われも新しき春を生きん

この短歌に出てくる「冬蓄」には、きつと亡くなった夫の命がこの冬蓄の中に宿って甦ってくることを予感して、内面から夫の命を発見しているように感じられた。「われも新しき春を生きん」という決意は、死んだ夫の真の願いが自分を生かしてくれるのだと深い愛情を伝えて

いるかのようだ。「この街に君が居ないと思う午後 紅茶も寂しいセピア色なり」などの短歌は、夫の不在から紅茶の色をなぜかセピア色と見てしまい、寂しさを際立たせている。色褪せてくる紅の中に人間の情熱の果てしないドラマを垣間見ている思いがしてくる。

三章「紅椿」<sup>べにつばき</sup>は、宮崎さんの今回の歌集のテーマである恋情が特に込められた短歌が集まっている。

逢うたびに椿一輪紅を濃く

濃くしていつか散りゆく運命<sup>さだめ</sup>

紅の椿の強烈な色彩に人間の命の源のようなものを透視するだけでなく、そこに宮崎さんは絶えず立ち還ろうとしている。「運命」<sup>さだめ</sup>とは、情熱を突き詰めていき、そこに殉じていくような激しさを抱え込んでいる。それゆえに「純粹という原石を研きつつ われはわれらしく生きたいと願う」という短歌が気負いなく自然に詠われるのだろう。

第四章「紅桜」<sup>コスモス</sup>は、恋情を想起し、その愛が宇宙へまで届かせようと願うようになる。

雨だれの夜半に目覚めて君想う

宇宙のごとく愛は果てなし

愛する人はこの世に存在しないが、その存在が宇宙の果てにいることを感じている。このような心境になるまでに人はどれほど涙を流す必要があったろうか。そんな無言の対話を感じさせてくれる短歌だ。「暗闇を手さぐりで歩く人生の どのシーンにも色彩のあり」という短歌は、人間は生きていく限り、光を放ち続ける存在なのだと言っていて、読むものの感情に深く広がっていく秀作だろう。

第五章「陽炎」<sup>かげろう</sup>は、頭が割れるかのように夫の愛の束縛から離れて、異なる愛に出逢う瞬間を幻視しているのだろうか。

春日和痛む頭を横にして  
庭先見ればゆらゆら陽炎かげろう

人間は様々なことを思い煩うことができる存在だ。その悩める存在そのものを肯定するように宮崎さんの短歌は作られている。そして悩みや痛みも実は「ゆらゆら陽炎」のような幻影だと見通している。現実であり幻影であるかのような虚実の境を短歌で描こうとしているのだらう。「今日を生き明日を生きよう 新しきわれにあうため君にあうため」という短歌は、短歌の定型を超えてしまった自由詩のような溢れる奔放な響きがある。この短歌は詩との境界すれすれに飛躍しても、新たな自己を促す思いが勝っているからだらう。

第六章「野草」のぐさは、新たな恋情が生まれ、その恋情の行方をどこか冷静に見詰めている短歌だ。

きりりとして愛を告白する君を

何も言わぬ時も聞きおり

この「何も言わぬ時」の沈黙の思いがどのようなものであるかを宮崎さんは、聞き取ろうとする。きつと男の言葉の真まことと嘘うその両方を思い図っているのだらう。その言外の言葉の意味を伝えようと試みている。それは恋情のもつ二面性をも暗示している。最後の短歌である「踏まれれば踏まるるほどにやわらかな 野草のように吾はなりたし」は、宮崎さんの人生哲学を語っている。野草が踏まれると硬くなるのだが、宮崎さんは踏まれ続けてもより柔らかな野草でいたいという願いを持っている。逆境こそが自分を鍛えて更なる未知の自分にしていく定めを感じているからだらう。

宮崎さんは「紅椿」のような艶やかな花を宿すだけでなく、地味だが野草などを内部に観て、自己の存在と重ねて感じ考えようとしている。多くの人びとにそんな生を促し肯定する歌集を読んでもらいたいと願っている。